

隨筆 寶の出船

南波松太郎

戦時中は食糧の不足甚しく、人が馬糧や肥料を食べたり、或は野草を追つて食を求めるなどの耐乏生活も一つの目的のためにさほど苦痛とも感じなかつた。ところがさて終戦となると、俄かに氣が緩んで、人々が飢餓線上に漂っていたその際にアメリカから小麦の船が入港した。ララ物資が運ばれて来たときには、各新聞は寶船の入港として書き立て、國民もまた干天に雲を見るの喜びであつた。

戦前わが日本は世界第三位、600餘萬總トンの船腹があつて、年々數億トンの物資を運んでいたが、誰も船の有難味を感じなかつた。戦後、始めて船というものが人間生活に必要な物資を運んでくれる寶であると認識されたことになる。これは敗戦の一戦果といえよう。日本はさすが海國だけに、神話時代から船の話がたくさんあつて、とりわけ素戔鳴尊は船を浮寶として尊重された。

また崇神天皇17年(西暦前81年)には『船は國の要用』として造船を奨励されたのである。即ち船は古代より重器であり寶器であつたが、長い間にいつしかその恩に馴れて、有り難味を忘れていたのが、戦後再びその考えが再興したらしい。まことに喜ばしいことである。

さてそのいわゆる寶船ということについては、わが國では室町時代末期以來一つの信仰として、上下を通じて廣く國民の間に行きわたつて現在に及んでいる。この寶船は和漢船用集(明和3年、西暦1766年著、船舶に關する大辭典)では有圖無形之部にあつて實用の船ではない。

元來これは紙に寶船の繪をかき、節分の夜枕の下に敷いて吉夢をみるという信仰からきている。現存の古い寶船は後陽成天皇宸刻の板行で、節分の夜宿直の官人に賜つたもので

ある。それから公家武家に流行し、神社佛閣で板行授與するようになって國民の間に廣く流布し、ついに個人もこれを印行して知人に配るに至つてますますその種類は多岐豊富となつた。板行の初期は簡素な墨刷りであつたが、江戸時代後期では錦繪式の華麗多彩刷りのものが出ています。

いまこれらの多くの寶船を分類してみると、西洋型やジャンクはないほとんど全部日本型木造船で、船首には龍首や鰐首のある豪華船も相當ある。構造からみると、甲板のないものと有るものとがあり、甲板の有るものでは簡単な平甲板のもの、これに御座即ち甲板室のあるもの、及び高樓付御座のあるものに分類することができる。用途からみると、現在と同様に貨物船、貨客船及び旅客船にわかれる。積荷は稻一束だけのものもあるが、一般に米俵と桃太郎が鬼ヶ島から持つて歸つたようなさまざまの寶物である。ここに米が船腹の大部分を占めているのはなかなか面白いことで、日本人と米とは離れられぬ因縁があることを示している。なお織節の歌ではないが酒を積んだらしい壺もある、變つたのでは白鼠がおり、龍が乗つていることもある。

乗客は歌聖人丸さん或は大黒さん一人乗りあり、七福人あり。彌陀三尊に四天王があり、青樓七福美人があり、また役者見立七福人などもある。いずれも船に滿々と載せられている。そして豊かに風をはらんだ帆を持つている。まれにはこの帆のないものもあるが、一般に日本式一枚帆で、帆印は初期のものには猿(バク)の字が書いてある。これはバクが惡夢を食うという迷信からきているらしい。後世には寶や壽の字を書いている。その他寶珠、松竹に鶴龜、富士に旭光などのめでたい圖樣があ

る。變つたのでは南無阿彌陀佛というのがある。

普通は單獨航行であるが、まれには船團航行のものもある。その船の向きは左向きが斷然多く、右向は少ない。また後向きのは全然なく前向きである。前向きといつても真正面のものほとんどなく、少し左を向いているのが多い。なぜ左向きが多いか? 日本では左大臣が右大臣の上位であり、左は直(ヒタ)をあらわし右は曲(ミギリ)をあらわしている。しかるに隣國中國では右に出づるものなしとか、左遷とかいつて右が上位になつている。歐米諸國では右は right 正である。日本では左右とつらなるが、西洋文化の鐵道踏切は一す首を右左ということになり、日本と大陸とでは左右の觀念が全く逆である。また船の舷燈の色は右は緑で左は赤である。赤は危險信號で緑は平和を示すが、こゝでも日本の古來の思想と違つている。この日本の古來の考え方が暗々裏に寶舟を左向きにしているものと思われる。

なお左向きについて他の考え方がある。それは近畿地方の迷信で、道を歩いているときにイタチが前を右から左に横ぎれば吉、その逆は不吉としている。即ち前を左え行くのが吉ということは日本人の着物は左前であつて、右から左へ行くのは懷中に物が入ることを意味して、吉としているのではないとも思われる。即ち寶船の左向きは入船をあらわし、寶船の本領を發揮している。後向きのないのは入船の思想に反するからであろう。真正面向きのないのは日本人が非對稱の美を喜ぶためかも知れない。前に述べたように寶船は、だいたい入船の思想と關連して掌ばれるが、これからの日本は入船無論結構で鑽石、綿花、羊毛を積んできて貰いたい。しかし機械、綿布、絹布を滿載した後向きの出船もまた寶船でなければならない。ここに寶船ならぬ黒船寶船という後向きのものが百年ほど前に石刷りで刊行されたが、これは3本マストの西洋型帆船である。幕末の頃だから船そのものが出て行けという桃色的意味のものであるらしい。従つて後向きに表わすのは當然である。しかしこれからは桃色的ではなくて、日本再興發展の輸出貿易の出船としての後向きを大いに奨励すべきである。